

Title	「-まる」「-める」を伴う形容詞派生動詞の使用傾向 : 自他対応に着目して
Author(s)	新谷, 知佳
Citation	阪大日本語研究. 2024, 36, p. 45-62
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94776
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「一まる」「一める」を伴う形容詞派生動詞の使用傾向 —自他対応に着目して—

Usage of adjective-derived verbs with *-maru* and *-meru*: Focusing on corresponding transitive and intransitive verbs

新谷 知佳
SHINTANI Chika

キーワード：形容詞派生動詞，コーパス，使用傾向，使用頻度，使用比率

要旨

「語」である形容詞派生動詞と、「句」である「形容詞の連用形+なる／する」の類似性に着目し、コーパスより収集したデータをもとに、それぞれの使用傾向の分析および、使用傾向に関わる要因の考察を行う。まず、自他の比較より、「語」では他動詞形の使用比率が高く、「句」では自動詞相当表現の使用比率が高いという使用傾向がみられることを示す。そして、その要因は「語」ではその形態的特徴、「句」では「なる」と「する」の語彙的意味の違いにあると考える。次に、「語」と「句」の比較より、自動詞表現では形容詞によって使用傾向に差がみられ、他動詞表現ではどの形容詞においても「語」の使用比率が高い傾向がみられることを示す。前者の要因として「語」と「句」の意味の違いおよび共起する名詞句の偏りを挙げ、後者の要因は自他の傾向にみられた要因と共通することを述べる。以上の結果は、形態的特徴だけではなく、意味的条件、統語的条件によっても使用傾向に差が現れることを示唆している。

1. はじめに

日本語の動詞には、「強まる」「強める」のように、形容詞の語幹に「一まる」「一める」という形態素が付加した形容詞派生動詞がある。形容詞の派生名詞である「強め」「強み」「強さ」などと比べて、「一まる」「一める」が付加する形容詞派生動詞の生産性は低く¹⁾、その数は限られている。本稿では、このような「一まる」「一める」が付加したもののみを指して「形容詞派生動詞」と呼び、形容詞派生動詞の使用傾向について考察を行う。(1)に用例を示す。

- (1) a. 影響力が強まる。
- b. 新勢力が強める。

(1a)の自動詞文および(1b)の他動詞文は自他対応の関係にあり、「強まる」と「強める」は、変化の主体である「影響力」が自動詞文ではガ格で、他動詞文ではヲ格で現れるという統語的な違いがあるが、形態および意味に共通性がみられ、(1a)(1b)は、いずれも「影響力」の変化

を表すという点で共通している。

また、形容詞派生動詞は、「形容詞の連用形+なる」および「形容詞の連用形+する」と類似性がみられる。形容詞派生動詞は「語」であるのに対し、「形容詞の連用形+なる/する」は形容詞と動詞からなる「句」であるという違いがあるが、多くの場合、形容詞派生動詞と「形容詞の連用形+なる/する」を置き換えても文意が変化しない。(1)の形容詞派生動詞を「形容詞の連用形+なる/する」に置き換えた用例を(2)に示す。

- (2) a. 影響力が強くなる。
 b. 新勢力が影響力を強くする。

「一まる」を伴う自動詞形と「一める」を伴う他動詞形、そして「形容詞の連用形+なる」と「形容詞の連用形+する」は、それぞれ自他対応の関係にある。また、自動詞表現における「一まる」を伴う自動詞形と「形容詞の連用形+なる」の関係と、他動詞表現における「一める」を伴う他動詞形と「形容詞の連用形+する」の関係はいずれも、多くの場合置き換えても文意の変化しない「語」と「句」の関係にある。本稿では、このような形容詞派生動詞と「形容詞の連用形+なる/する」にみられる2つの関係に着目した比較を行う。

形容詞派生動詞を「形容詞の連用形+なる/する」と比較することによって、形容詞派生動詞の使用傾向および使用傾向に関わる要因を示すことが、本稿の目的である。まず、使用傾向を明らかにするために、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJ)における使用頻度から算出した使用比率を用いた数量的な分析を行う。その後、BCCWJより収集した用例をもとに使用傾向に関わる要因の考察を行う。なお、本稿における「使用頻度」とはコーパスデータにおける用例数を、「使用比率」とは使用頻度から算出した割合を、「使用傾向」とは、使用比率の比較によって明らかとなった、自動詞形がよく用いられる、他動詞形がよく用いられるといった、実際の使用にみられる偏りを表す。

自他対応の関係に着目した比較では、形容詞派生動詞は他動詞形の使用比率が高く、「形容詞の連用形+なる/する」は自動詞相当表現の使用比率が高いという使用傾向がみられることを示す。そして、その要因として、形容詞派生動詞についてはその形態的特徴が、「形容詞の連用形+なる/する」については、「なる」と「する」のもつ語彙的意味がそれぞれ関わっていると考察を述べる。次に、「語」と「句」の関係に着目した比較では、自動詞表現では形容詞によって使用傾向に差がみられること、他動詞表現では、どの形容詞においても「語」の使用比率が高いという傾向がみられることを示す。自動詞表現にみられる使用傾向の要因として、形容詞派生動詞と「形容詞の連用形+なる/する」の意味の違いおよびガ格に現れる名詞句の偏りが関わっていると考察を述べる。他動詞相当表現については、自他の比較でみられたものと同じ要因、つまり形容詞派生動詞では他動詞形の使用比率が高く、「形容詞の連用形+なる

／する」では「形容詞の連用形＋なる」の使用比率が高いことによるものであることを述べる。これらの考察をもとに、使用傾向には、形態的特徴だけではなく、意味的条件や統語的条件が関わっていることを提示する。

本稿は次の構成をとる。2節で考察の前提、3節で分析対象および用例収集の方法を示し、4節でBCCWJにおける自他の使用傾向の分析および考察、5節でBCCWJにおける自動詞表現、他動詞表現それぞれの「語」と「句」の使用傾向についての分析および考察を行った後、6節で「一まる」「一める」を伴う形容詞派生動詞の使用傾向およびその要因について整理し、7節でまとめと今後の課題を述べる。

2. 考察の前提

2.1. 自他対応について

本稿で扱う形容詞派生動詞にみられる自他対応の関係について改めて確認する。「一まる」が付加したものが自動詞形、「一める」が付加したものが他動詞形にあたり、これらは、(3)に示す①～③の定義を満たす自他対応の関係にある。(3)は奥津(1967)、早津(1987)を参考にまとめられた新谷(2022)の自他対応の定義である。

- (3) ① 自動詞と他動詞が形態的に共通する部分をもつもの
- ② 自動詞と他動詞の表す意味に同一性がみられるもの
- ③ 自動詞文のガ格が他動詞文の動作の対象を表すヲ格として現れるもの

(新谷 2022 : 74)

(3)の定義を満たす「早まる：早める」の用例を(4)(5)に示す。

(4) また、木のおいこの成分は、人の疲労回復が早まるということもわかってきている。

(出版・書籍 2005)

(5) ブドウ糖質がはたらくためにビタミンB1は不可欠な存在で、疲労回復を早めます。

(出版・書籍 2003)

(4)は自動詞形「早まる」、(5)は他動詞形「早める」の用例であるが、「早まる」と「早める」は、「hayam」という形態的に共通する部分を持ち、「時間的に先である」(日本国語大辞典)という点で意味に同一性がみられ、「疲労回復」という名詞句が自動詞文ではガ格に、他動詞文ではヲ格に現れている。

しかし、(3)の定義を満たす自他対であっても、すべての用例において自動詞と他動詞の双方で表現できる、つまり自他のいずれを用いても規範的な文になるわけではない。たとえば、(6)は、「度を過ぎて早くする。急ぎすぎる。多く、あわてたり、あせったりして、判断を誤り、軽は

ずみなことをすることにいう。」(日本国語大辞典) という意味で用いられている自動詞「早まる」であるが、他動詞「早める」はこの意味で用いることができない。

- (6) 「これから、わたしは船まで戻ろうと思う」カムロギは慌てて、早まるのを止めようとした。
(出版・書籍 2002)

また、自動詞文のガ格および他動詞文のヲ格に現れる名詞句によって、自他のいずれかでのみ表現可能な用例もある。(7)に他動詞「高める」の用例を示す。

- (7) 上司にばれないように、何か自分を高める時間にしたいと思います。
(特定目的・知恵袋 2005)

「自分の能力を高める」のように語を補えば、「自分の能力が高まる」と自動詞を用いて表現できるが、ヲ格に現れる名詞句が「自分」のみの場合には、「自分が高まる」と表現できない。

このように、自動詞と他動詞の双方で表現できる用例であるか否かは、動詞だけで判断できるものではなく、その動詞がどのような意味で用いられているか、そして自動詞文のガ格および他動詞文のヲ格にどのような名詞句が現れているかによって、判断できるものである。本稿ではこの点に留意し、BCCWJ から得られた用例のうち、(6)(7) のような用例を除外して、自動詞と他動詞の双方で表現可能な用例に限って分析を進めることとした。

2.2. 自他対応をもつ動詞対の使用傾向について

自他対応をもつ動詞対の形態的特徴と使用傾向の関連性について論じたものとして新谷(2022)を取り上げる。新谷(2022)では、自他対応をもつ動詞であっても、自動詞がよく用いられる場合と他動詞がよく用いられる場合があることに着目し、BCCWJ コアデータにおける使用頻度を用いた分析が行われている。新谷(2022)は、奥津(1967)を参考に自他対応をもつ動詞対をその形態的特徴から、自動化、他動化、両極化の3つに分けた上で、それぞれの動詞対における使用比率を分析している。そして、それぞれの形態的特徴をもつ動詞対の自他の使用傾向を(8)のように示している。

- (8) a. 他動化の動詞対では、自動詞の使用比率が高い動詞対の方が他動詞の使用比率が高い動詞対よりも多く、形態素が付加されて形成された他動詞の方が、使用頻度が低い傾向がある。
- b. 自動化の動詞対では、他動詞の使用比率が高い動詞対の方が自動詞の使用比率が高い動詞対よりも多く、形態素が付加されて形成された自動詞の方が、使用頻度が低い傾向がある。
- c. 両極化の動詞対では、自動詞と他動詞の使用頻度に大きな偏りはないという傾向がある。
(新谷 2022 : 83-84)

本稿で扱う形容詞派生動詞は、その形態的特徴から、「他動詞と、他動詞の語幹に -ar- などの形態素が付加した自動詞によってなされる」（新谷 2022：78）自動化の動詞対にあたる。そのため、(8b)の記述より、「-まる」を伴う自動詞形の方が「-める」を伴う他動詞形よりも使用頻度が低いと推測される。

しかし、同じく自動化の動詞対である「挟まる：挟む」や「決まる：決める」などと異なり、形容詞派生動詞には「形容詞の連用形+なる／する」という類義表現が存在する。そのため、形容詞派生動詞の自他だけではなく、これらの表現も含めた使用傾向を捉える必要があると思われる。そこで、本稿では、より詳細な形容詞派生動詞の使用傾向を明らかにするために、形容詞派生動詞だけではなく、「形容詞の連用形+なる／する」との比較を通じた分析を行うこととした。

2.3. 形容詞派生動詞と「形容詞の連用形+なる／する」の類似性

「形容詞の連用形+なる／する」は、「形容詞の連用形+なる」が自動詞文に、「形容詞の連用形+する」が他動詞文に相当し、形容詞派生動詞と同じく自他対応の関係にあるものである。つまり、自動詞文のガ格に現れる名詞句が他動詞文のヲ格に現れる点で、形容詞派生動詞と「形容詞の連用形+なる／する」は意味だけでなく統語的にも類似した表現であると言える。1節で提示した用例を再掲する。

- (9) a. 影響力が強まる。
 b. 新勢力が影響力を強める。 (1)の再掲

- (10) a. 影響力が強くなる。
 b. 新勢力が影響力を強くする。 (2)の再掲

(9)(10)は形態的に共通した特徴をもち、意味的にも同一性がみられ、いずれにおいても、自動詞文のガ格および他動詞文のヲ格に「影響力」という名詞句が現れている。形容詞派生動詞と「形容詞の連用形+なる／する」には、このような類似性が確認できる用例が多くみられる。

ただし、必ず置き換えられるわけではなく、(11)のような、形容詞派生動詞から「形容詞の連用形+なる／する」に置き換えることができない用例も存在する。

- (11) a. 不信が強まる。
 b. 失態の発覚によって不信を強める。

- (12) a.* 不信が強くなる。
 b.* 失態の発覚によって不信を強くする。

(11)では、「不信」が自動詞文のガ格および他動詞文のヲ格に現れているが、「不信が強い」という表現ができないことから、(12)は非文になっている。

反対に、(13)のような、「形容詞の連用形+なる／する」から形容詞派生動詞に置き換えるこ

とができない用例も存在する。

(13) a. チームが強くなる。

b. 有力選手の加入によってチームを強くする。

(14) a.* チームが強まる。

b.* 有力選手の加入によってチームを強める。

(13) では、「チーム」が自動詞文のガ格および他動詞文のヲ格に現れているが、このような名詞句の場合には、(14) に示したように形容詞派生動詞の文は非文となる。

これらの形容詞派生動詞と「形容詞の連用形+なる／する」の置き換え可否は、自動詞文のガ格および他動詞文のヲ格に現れる名詞句によって決まると考えられる。

さらに、(15) のように、一部の二格句は「形容詞の連用形+なる／する」と共起できないという統語的な制約もみられる。

(15) a. 予定が来月に早まる。

b. 予算の都合で予定を来月に早める。

(16) a. 予定が (*来月に) 早くなる。

b. 予算の都合で予定を (*来月に) 早くする。

以上、「形容詞の連用形+なる／する」は、形容詞派生動詞と意味的、統語的に類似した表現であり、置き換えても文意の変わらない用例が多い一方で、置き換えることができない用例も存在することを確認した。

3. 分析対象および用例収集について

『日本国語大辞典精選版』の初出年代から比較し、有対自動詞²⁾の性質について分析を行っている関口(2020)を参照する。関口(2020)は、杉岡(2002)の「める、まる」がついた動詞が形容詞のもつ段階性スケール内の程度の変化を表すという議論をふまえて、形容詞派生動詞の初出年代とそれぞれの動詞の特徴の考察を行っている。関口(2020)で取り上げられている形容詞派生動詞 16 対を(17)に示す。

(17) 温まる：温める，清まる：清める，狭まる：狭める，高まる：高める，強まる：強める，ぬくまる：ぬくめる，速まる（早まる）：速める（早める），低まる：低める，広がる（拡がる）：広げる（拡げる），広まる：広める，深まる：深める，緩まる：緩める，弱まる：弱める，薄まる：薄める，丸まる：丸める，固まる：固める

「薄まる：薄める」「丸まる：丸める」「固まる：固める」が「初出年代にそれほど差がみられない形容詞派生動詞」に、その他は「自動詞が遅れて生まれてくる形容詞派生動詞」に分類

されている。関口(2020)は、前者は変化の終結点が強く意識され、段階的な程度変化の解釈が相対的に弱く、後者は段々とある状態に向かっていくという段階的な程度変化の性質が強く、変化の終結点が想定されにくいことを指摘している。ただし、「薄まる：薄める」は後者とふるまいを同じくしている可能性があるという。

本稿では、関口(2020)における動詞の表す程度性に関する指摘および、新谷(2022)における形態的特徴が使用傾向に関わるとする指摘を参考に、(18)に示す3点を、分析対象の選択基準として定めた。(18)は、自他の使用傾向および「語」と「句」の使用傾向を分析するにあたり、その他の条件を揃えるために設けたものである。

- (18) a. 自動詞と他動詞の1対1の対応をもつもの
- b. 共通した形態的特徴をもつもの
- c. 段階的な程度変化を表すという点で、「形容詞の連用形+なる／する」と共通した意味的特徴をもつもの

(18a)の基準を満たさないものとして、「緩まる：緩める」「ぬくまる：ぬくめる」がある。「緩まる：緩める」には、「緩む」という自動詞、「ぬくまる：ぬくめる」には、「ぬくもる」という自動詞が存在し、自動詞2つ、他動詞1つの対応となっている。これらは、使用比率について、単純な自他の使用比率での比較が困難であるため、対象から外した。

(18b)の基準を満たさないものには、「温まる：温める」「狭まる：狭める」がある。「温まる：温める」に対応する「形容詞の連用形+なる／する」は「温かくなる：温かくする」であり、他の形容詞と比較して、「形容詞の連用形+なる／する」の形態素が多い。また、「狭まる：狭める」は、「狭い」の「m」の音が「b」の音に変化している点で形態的に異なっている。このような形態的な差が使用傾向に影響する可能性があるため、本稿では対象から外した。

そして、(18c)の基準を満たさないものには、「固まる：固める」「丸まる：丸める」がある。「固まる：固める」「丸まる：丸める」は、いずれも関口(2020)において、段階的な程度変化の解釈が相対的に弱いとされていたものである。(19)(20)に例を示す。

- (19) a. ?太郎が凝固剤で油を少し固める。
- b. 太郎が凝固剤で油を少し固くする。
- (20) a. ?次郎が団子を少し丸める。
- b. 次郎が団子を少し丸くする。

(19b)(20b)では、「少し」が「固い」あるいは「丸い」の程度性を表し、問題なく許容されるのに対し、(19a)(20a)では、「少し」が動詞の程度性を表しているという解釈は難しく、文の許容度も下がる。他の動詞にはみられない、このような程度性の表現可否が、使用傾向に関わっている可能性があるため、本稿では対象から外した。

この他、「広がる（拡がる）：広げる（拡げる）」と「広まる：広める」は、いずれも「広い」の派生動詞であると考えられ、単純な比較が難しいこと、「清まる：清める」と「低まる：低める」は、それぞれ BCCWJ における用例が「清まる」は 5 件、「低まる」は 10 件と少なく適切な比較ができないこと、を理由として対象から外した。

(18) の基準を満たし、本稿で分析の対象とする 6 対を (21) に示す。

(21) 高まる：高める，強まる：強める，弱まる：弱める，深まる：深める，早まる：早める³⁾，
薄まる：薄める

コーパスは、文体によって使用傾向が異なる可能性を考慮し、さまざまな文体のデータが収容されている BCCWJ を用い、コーパス検索アプリケーション『中納言』における文字列検索⁴⁾によって、用例を収集した。検索結果のうち、通常の文の中で用いられているもののみを対象とし、見出しや川柳など特殊な場面で使用されているものを除いた他、「高め合う」「弱まり始める」のような複合語として用いられているものも除いた。そして、これらのうち、自動詞と他動詞のいずれかの表現が不可能な用例も手作業で取り除いて、最終的に分析対象とする用例の使用頻度を算出し、分析を進めた。また、同様の手順で (21) に対応する「形容詞の連用形＋なる／する」の使用頻度も求めた。

4. 形容詞派生動詞と「形容詞の連用形＋なる／する」の自他の使用傾向について

4.1. 自他の使用傾向の分析方法

形容詞派生動詞の自他対における自動詞と他動詞の使用比率、および「形容詞の連用形＋なる／する」の自他対における自動詞相当表現と他動詞相当表現の使用比率の比較を行う。それぞれの自他対における使用比率は、新谷 (2022) の手法を援用し、3 節に示した手順で得られた形容詞派生動詞および「形容詞の連用形＋なる／する」の使用頻度を用いて算出した。たとえば、形容詞派生動詞の自他対である「早まる：早める」では、自動詞形「早まる」の使用頻度は 165 件、他動詞形「早める」の使用頻度は 427 件であるため、その総数 592 件に対する割合を算出し、自動詞の使用比率は 28%、他動詞の使用比率は 72% となる。

4.2. 自他の使用傾向の分析結果

まず、形容詞派生動詞の自他対における自動詞と他動詞の使用比率のグラフを図 1 に示す。図 1 は対象とする 6 対の自他対を自動詞比率の低い順に上から並べたものである。また、グラフ内の数値は使用頻度を表している。なお、各自他対の使用頻度には大きな差がみられるが、使用比率について分析を行うため、その差は問題にしない。

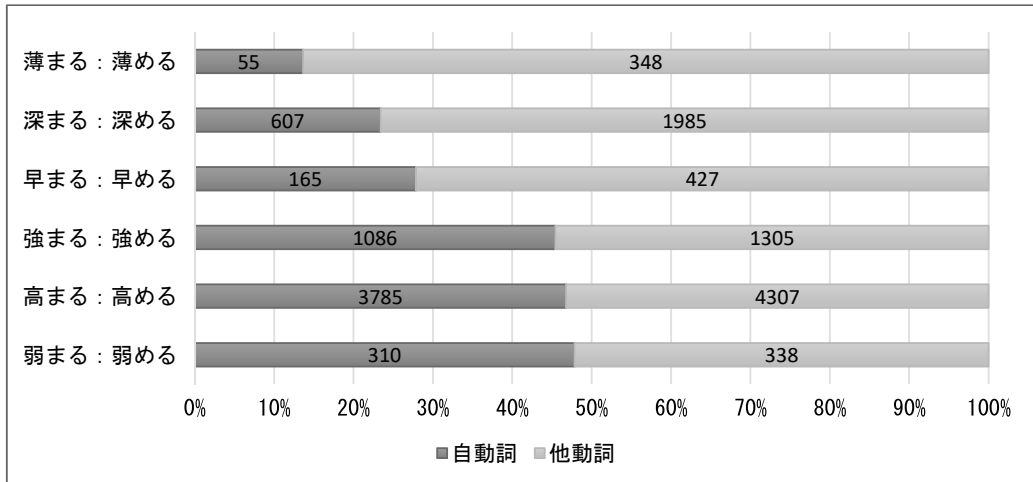


図1 BCCWJにおける形容詞派生動詞の自他の使用傾向

6対の自動詞の使用比率の平均値は34%で、6対の形容詞派生動詞全体では、他動詞がよく用いられるという使用傾向を示している。各自他対を個別にみてみると、「薄まる：薄める」「深まる：深める」「早まる：早める」はそれぞれ自動詞の使用比率が14%、23%、28%で、他動詞がよく用いられるという使用傾向を示している。一方で、「強まる：強める」「高まる：高める」「弱まる：弱める」はそれぞれ自動詞の使用比率が、45%、47%、48%と、わずかに他動詞の使用比率が高いものの、自動詞と他動詞の使用が同程度であるという使用傾向を示している。

続いて、「形容詞の連用形+なる／する」の自他対における自他の使用比率のグラフを図2に示す。提示順は比較のため、図1と同じにしてある。

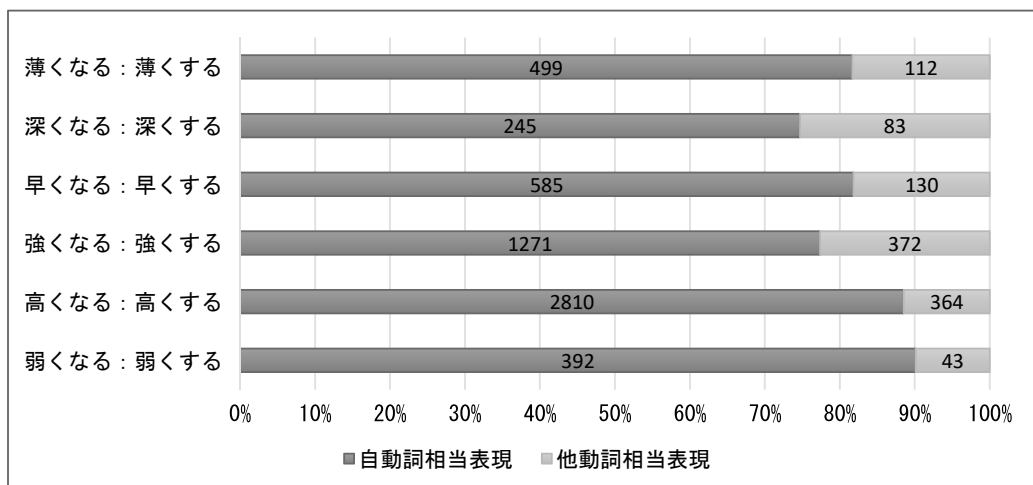


図2 BCCWJにおける「形容詞の連用形+なる／する」の自他の使用傾向

6 対の自動詞相当表現つまり「形容詞の連用形+なる」の使用比率の平均値は 82%で、「形容詞の連用形+なる/する」では、自動詞相当表現がよく用いられるという使用傾向を示している。

「形容詞の連用形+なる/する」の自他の使用傾向の比較では 6 対の差は小さく、最も自動詞相当表現の使用比率の高い「弱くなる:弱くする」では 90%、最も低い「深くなる:深くする」でも 75%と高い値を示している。この結果から、「形容詞の連用形+なる/する」では、どの自他対においても「形容詞の連用形+なる」がよく用いられるという使用傾向を示していることがわかる。

以上の分析より明らかとなった、形容詞派生動詞および「形容詞の連用形+なる/する」の自他の使用傾向を (22) にまとめる。

- (22) 形容詞派生動詞では、「一める」を伴う他動詞形がよく用いられる傾向にあるのに対し、「形容詞の連用形+なる/する」では、自動詞相当表現である「形容詞の連用形+なる」がよく用いられる傾向がある。

次節にて、このような使用傾向がみられる要因について考察を試みる。

4.3. 自他の使用傾向に関わる要因についての考察

形容詞派生動詞および「形容詞の連用形+なる/する」の自他の使用傾向として (22) のような傾向がみられる要因について考察を行う。

まず、形容詞派生動詞の自他の使用傾向であるが、「一める」を伴う他動詞形がよく用いられるという点について、その形態的特徴に着目すると、新谷 (2022) の自動化の動詞対では他動詞の使用比率が高いという指摘と一致していることがわかる。そのため、このような傾向がみられたのは、形容詞派生動詞のもつ形態的特徴によるところが大きいと考えられる。ただし、「強まる:強める」「高まる:高める」「弱まる:弱める」については、他の 3 対ほど明らかな偏りがみられない。これには何らかの他の要因が関わっている可能性があるが、全体の傾向に影響を与えるほどの差異ではないため、ここではこれ以上問題にせず、稿を改めて詳察したい。

一方、形容詞派生動詞と意味的に類似した「形容詞の連用形+なる/する」では、自動詞相当表現である「形容詞の連用形+なる」の方がよく用いられるという使用傾向がみられた。ここには、動詞「なる」と「する」のもつもとの語彙的意味の違いが関わっていると考えられる。動詞「なる」には、「あるものやある状態から、他のものや他の状態に変わる。」(日本国語大辞典)という語彙的意味があるが、「する」単独では、このような意味はない。「する」に状態変化の意味が現れるのは、「(形容詞の連用形、助詞「に」「と」などのあとに付けて)ある状態、あるものにならせる。」(日本国語大辞典)という記述があるように、特定の語とともに

用いられるときに限られる。

換言すると、「形容詞の連用形」の有無に関わらず、動詞「なる」は状態変化を表し得るのに対し、動詞「する」は「形容詞の連用形」あるいは助詞「に」「と」などがなければ、状態変化を表すことができないという違いがみられる。このような動詞の語彙的意味における違いが、「形容詞の連用形＋なる」の方が用いられやすいという使用傾向に関わっている、つまりもともと状態変化の意味を有している「なる」の方が用いられやすいのだと考えられる。

形容詞派生動詞も「形容詞の連用形＋なる／する」も、同じ形容詞あるいは形容詞語幹を伴って何らかの状態の変化を表すという点で類似しているにも関わらず、その自他の使用傾向が異なるのは注目すべき事実である。「形容詞の連用形＋なる／する」では、語彙的意味として状態変化を表し得る「なる」を伴った「形容詞の連用形＋なる」の方が、使用比率が高いのに対し、形容詞派生動詞では他動詞形が多く用いられている。この結果は、自他の使用傾向には意味的特徴よりもその形態的特徴が優先的に影響することを示唆していると言える。

5. 自動詞表現および他動詞表現における「語」と「句」の使用傾向

5.1. 「語」と「句」の使用傾向の分析方法

次に、本節では、「語」である形容詞派生動詞と「句」である「形容詞の連用形＋なる／する」の類似性に着目し、自他それぞれにおける「語」と「句」の比較を行う。自動詞表現では、形容詞派生動詞の自動詞形「一まる」と「形容詞の連用形＋なる」の使用比率を比較する。そして、他動詞表現では、形容詞派生動詞の他動詞形「一める」と「形容詞の連用形＋する」の使用比率を比較する。

使用比率の算出方法は、自他の比較の際に用いた方法を応用し、「語」と「句」の合計における「語」と「句」それぞれの割合を算出する。たとえば、「薄まる」と「薄くなる」では、「薄まる」の使用頻度が55件、「薄くなる」の使用頻度は499件であるため、その総数554件に対する形容詞派生動詞の自動詞形の使用比率は10%、「形容詞の連用形＋なる」の使用比率は90%となる。なお、分析に使用するデータは4節の自他の使用傾向の分析と同じものである。

5.2. 「語」と「句」の使用傾向の分析結果

まず、自動詞表現における「語」と「句」の使用傾向を表したグラフを図3に示す。ここでも提示順は図1と同じにしてある。

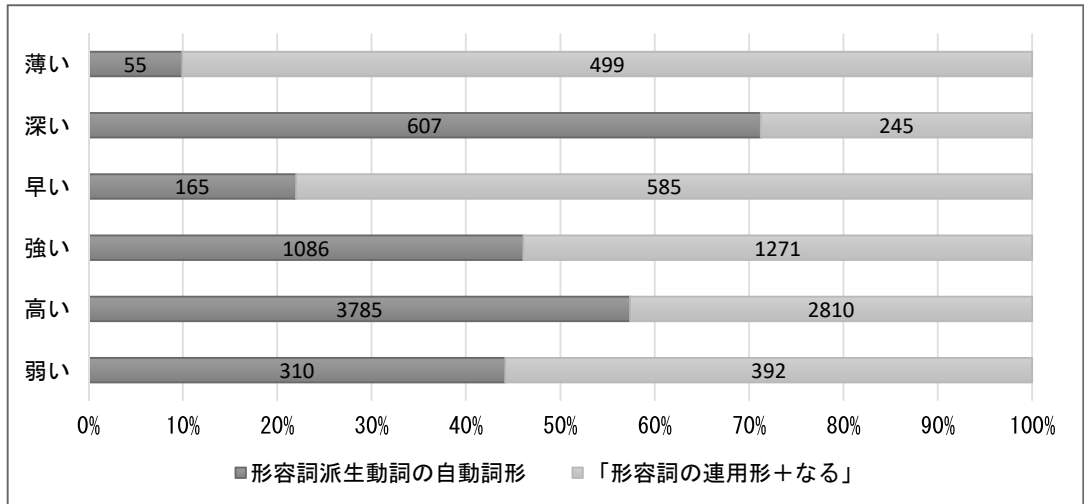


図3 BCCWJにおける自動詞表現の「語」と「句」の使用傾向

「語」である形容詞派生動詞の使用比率の平均値は42%であった。しかし、その使用比率は形容詞によって大きく異なっている。「薄い」と「早い」では、「語」の使用比率が低く、「強い」「高い」「弱い」では、「語」の使用比率と「句」の使用比率が同程度である。そして、「深い」では、「語」の使用比率が高い。「語」がよく用いられるか、「句」がよく用いられるかは、形容詞によって異なっていることが読み取れる。

続いて、他動詞表現における「語」と「句」の使用傾向を表したグラフを図4に示す。提示順は図1と同じである。

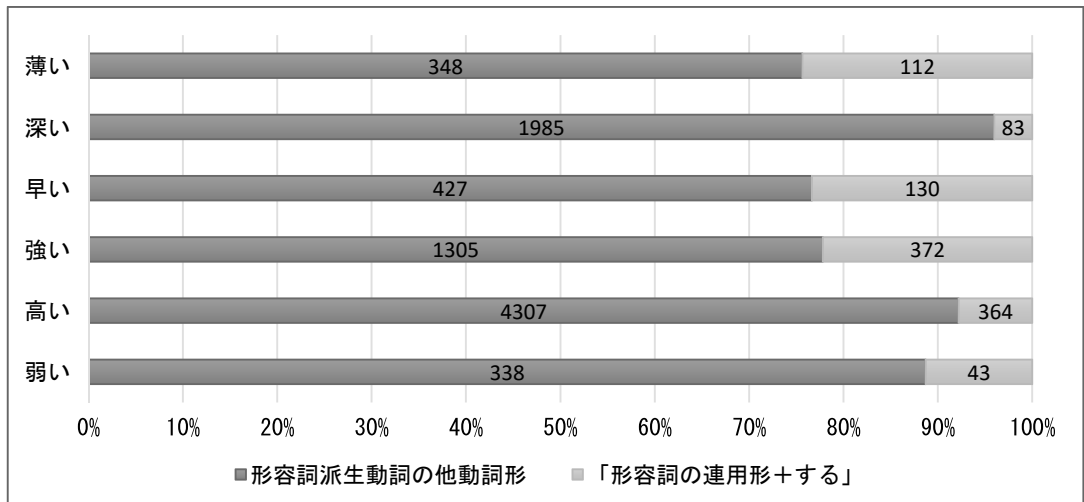


図4 BCCWJにおける他動詞表現の「語」と「句」の使用傾向

「語」である形容詞派生動詞の他動詞形の使用比率の平均値は、85%と高い値を示している。各形容詞を個別にみても、最も高い「深い」で96%、最も低い「薄い」で76%と、いずれにおいても「語」の使用比率が高い。この結果より、他動詞表現では、「-める」を伴う他動詞形の方がよく用いられるという傾向がみられることがわかる。

以上の分析より明らかとなった、「語」である形容詞派生動詞と「句」である「形容詞の連用形+なる/する」の使用傾向を(23)にまとめる。

- (23) 自動詞表現では、形容詞によって「語」がよく用いられる傾向にあるものと、「句」がよく用いられる傾向にあるものがある。それに対して、他動詞表現では、どの形容詞においても「語」がよく用いられる傾向がある。

次節にて、このような使用傾向がみられる要因について考察を試みる。

5.3. 「語」と「句」の使用傾向に関わる要因についての考察

まず、「語」と「句」の意味の違いについて考えてみたい。2.3節で触れたように、「語」と「句」は置き換えても常に文意が変わらないわけではなく、「語」のみあるいは「句」のみで表現可能な用例も存在する。

たとえば、「薄まる」には、「薄い」のもつ「物の密度や濃度などが少ない。」(日本国語大辞典)という意味はあるが、「物の厚みが少ない。」(日本国語大辞典)という意味はない。そのため、(24)～(26)に示すように、前者の意味では「薄まる」「薄くなる」の両方の用例がみられるのに対し、後者の意味では、「薄くなる」の用例しかみられない。

- (24) 広口の密閉容器に入れ、好みの材料を漬け、冷蔵庫に入れてマリネする。味が薄まるまでくり返し使用できる。(出版・書籍 2005)

- (25) それに比べ醸造酒である日本酒やワインを水で割ると味が薄くなり風味も落ちます。(特定目的・知恵袋 2005)

- (26) しかし、そこは仮設の劇場である。外壁はどうしても薄くなる。(図書館・書籍 2002)

また、「高まる」の「数量や割合、また、物事の度合などが大きくなる。」(日本国語大辞典)という意味は、「高くなる」にもみられるが、「ある感情や気持ちの度合・程度が次第に強く、または激しくなる。」(日本国語大辞典)という意味は、「高くなる」にはみられない。(27)～(29)に用例を示す。

- (27) 第3に、サービス貿易の比率が高まっていることである。(特定目的・白書, 1995)

- (28) 近年、最高速度違反の比率が高くなってきている。(特定目的・白書, 1977)

- (29) いよいよ東国に入ったことで、緊張もかなり高まっている。(図書館・書籍, 1995)

このような意味の違いが「語」と「句」の使用傾向に影響を与えていると考えられる。つまり、「薄い」「早い」では、「形容詞の連用形+なる」を用いて「句」のみにみられる意味が表現されることが多いため、形容詞派生動詞の自動詞形の使用比率が低くなっている。これに対して、「深い」「強い」「高い」「弱い」では、「語」のみにみられる意味を表現する用例、「句」のみにみられる意味を表現する用例のどちらも偏りなく用いられる。そのため、形容詞派生動詞の自動詞形の使用比率が、「薄い」「早い」と比べて高い。

さらに、形容詞派生動詞の自動詞形の使用比率の高い4つの形容詞の中でも「深い」の形容詞派生動詞の自動詞形の使用比率が特に高い要因として、ガ格に現れる名詞句の偏りが考えられる。BCCWJから収集した用例のうち、「語」および「句」の表す変化の主体にあたる名詞の直後に、「ガ」が単独で現れている用例のみを対象に、それぞれの名詞句を長単位で取り出して集計したデータを用いて比較する。まず、「深まる」のガ格に現れる名詞句の上位5語およびその延べ語数を表1に示す。使用頻度の丸括弧内の数値は、延べ語数に対する割合を示している。

表1 「深まる」のガ格に現れる名詞句上位5語

	ガ格の名詞句	使用頻度
1	理解	67 (17%)
2	絆	18 (5%)
3	交流	15 (4%)
4	対立	14 (4%)
5	関係	13 (3%)
延べ語数		388

続いて、「深くなる」のガ格に現れる名詞句上位5語および延べ語数を表2に示す。

表2 「深くなる」のガ格に現れる名詞句上位5語

	ガ格の名詞句	使用頻度
1	皺(しわ)	10 (7%)
2	水深	6 (4%)
3	関係	5 (3%)
4	眠り	4 (3%)
5	溝	3 (2%)
延べ語数		152

表1、表2より、「深まる」と「深くなる」を比較すると、「深まる」のガ格に現れる名詞句には偏りがみられることがわかる。「深まる」で頻度1位である「理解」は、「深くなる」では

2件(1%)と少なく、表2には現れていない。また、「関係」は表1と表2のどちらにも現れているが、「深まる」では13件(3%)、「深くなる」では5件(3%)と、割合は同じ値を示しており、差がみられない。「深まる」におけるガ格名詞句に占める「理解」の割合は、「深くなる」と比べて高く、ガ格に現れる名詞句に偏りがみられることが要因となって、「深まる」の使用比率が高くなっている(図3)と考えられる。

これに対して、「強い」「高い」「弱い」では、このような名詞句の偏りはみられない。「強まる」「高まる」「弱まる」のガ格に現れる名詞句上位5語を表3に示す。

表3 「強まる」「高まる」「弱まる」のガ格に現れる名詞句上位5語

	強まる		高まる		弱まる	
	名詞句	頻度	名詞句	頻度	名詞句	頻度
1	傾向	82 (10%)	関心	196 (7%)	力	21 (11%)
2	動き	59 (7%)	声	95 (3%)	抵抗力	8 (4%)
3	見方	19 (2%)	必要性	86 (3%)	機能	6 (3%)
4	声	16 (2%)	期待	83 (3%)	勢い	5 (3%)
5	可能性	14 (2%)	緊張	69 (3%)	パワー	4 (2%)
延べ語数	834		2,721		186	

続いて、「強くなる」「高くなる」「弱くなる」のガ格に現れる名詞句上位5語を表4に示す。

表4 「強くなる」「高くなる」「弱くなる」のガ格に現れる名詞句上位5語

	強くなる		高くなる		弱くなる	
	名詞句	頻度	名詞句	頻度	名詞句	頻度
1	傾向	50 (5%)	割合	171 (10%)	力	21 (8%)
2	気持ち	44 (5%)	可能性	84 (5%)	気	9 (4%)
3	思い	26 (3%)	年齢	49 (3%)	骨	9 (4%)
4	力	24 (3%)	比率	44 (3%)	足腰	8 (3%)
5	声	15 (2%)	確率	41 (2%)	立場	6 (2%)
延べ語数	915		1,713		254	

表3より、「強まる」のガ格名詞句の頻度1位の語は「傾向」で82件(10%)、「高まる」の頻度1位の語は「関心」で196件(7%)、「弱まる」のガ格名詞句の頻度1位の語は「力」で、21件(11%)であることがわかる。そして、表4より、「強くなる」の頻度1位の語も、「強まる」と同様に「傾向」で50件(5%)であることがわかる。「弱くなる」の頻度1位の語も、「弱まる」と同様に「力」で21件(8%)である。また、「高まる」の頻度1位の「関心」は、「高くなる」

の上位5語には現れていないが、「高まる」において「関心」の割合が7%と高くないこと、「高くなる」において頻度1位の「割合」は、「高まる」でも58件(2%)で7位に位置する頻度で用いられる語であることにより、「語」と「句」の使用傾向における「高まる」の使用比率は、「深まる」の使用比率ほどの高い使用比率になっていないと考えられる。

以上の考察より、自動詞表現で形容詞によって使用傾向が異なっている要因として、「語」と「句」の意味の違いおよび、自動詞文のガ格に現れる名詞句の偏りが関わっていることを示した。

一方で、他動詞表現では、どの形容詞においても形容詞派生動詞の他動詞形の使用比率が高いという傾向がみられた。この点については、前節でみた形容詞派生動詞の自他の使用傾向では、他動詞の使用比率が高く、「形容詞の連用形+なる/する」の自他の使用傾向では、「形容詞の連用形+する」の使用比率が低かったことが関わっていると考えられる。特に、「形容詞の連用形+する」が「形容詞の連用形+なる」との対応をなして何らかの状態の変化を表すのは、「する」そのものにはない意味であることにより、他動詞表現では、一語で状態の変化を表すことができる形容詞派生動詞の他動詞形がよく用いられると思われる。

6. 「一まる」「一める」を伴う形容詞派生動詞の使用傾向とその要因

以上、4節および5節にて、形容詞派生動詞の使用傾向について、「形容詞の連用形+なる/する」と比較しながら考察を行った。再度、自他の比較および、「語」と「句」の比較によって明らかとなった、それぞれの使用傾向を(30)(31)に示す。

(30) 形容詞派生動詞では、「一める」を伴う他動詞形がよく用いられる傾向にあるのに対し、「形容詞の連用形+なる/する」では、自動詞相当表現である「形容詞の連用形+なる」がよく用いられる傾向がある。 ((22)の再掲)

(31) 自動詞表現では、形容詞によって「語」がよく用いられる傾向にあるものと、「句」がよく用いられる傾向にあるものがある。それに対して、他動詞表現では、どの形容詞においても「語」がよく用いられる傾向がある。 ((23)の再掲)

(30)のような使用傾向がみられる要因として、形容詞派生動詞についてはその形態的特徴が、「形容詞の連用形+なる/する」については、「なる」と「する」のもつ語彙的意味がそれぞれ関わっている。また、(31)のような使用傾向がみられる要因として、自動詞相当表現については、形容詞派生動詞と「形容詞の連用形+なる/する」の意味の違いおよびガ格に現れる名詞句の偏りが関わっている。他動詞相当表現については、自他の比較でみられたものと同じ要因、つまり形容詞派生動詞では他動詞形の使用比率が高く、「形容詞の連用形+なる/する」では「形容詞の連用形+なる」の使用比率が高いことによるものである。

以上の考察より、形容詞派生動詞の使用傾向には、形態的特徴が優先的に影響するが、形態的特徴だけではなく、意味的条件および統語的条件も関わっていることが示唆される。

7. おわりに

本稿では、形容詞派生動詞の使用傾向について、「形容詞の連用形+なる／する」との比較を通して、それぞれの自他の使用傾向および、自動詞表現、他動詞表現それぞれにおける形容詞派生動詞と「形容詞の連用形+なる／する」の使用傾向の分析を行った。そして、これらの使用傾向を示す要因についてコーパスの用例をもとに考察を試みた。

今後の課題として、各表現にみられる使用傾向の日本語教育への応用がある。現在の日本語教育では、「形容詞の連用形+なる」は初級段階で文法項目として扱われるが、形容詞派生動詞は、中上級レベルで文法あるいは語彙として単独で導入されるに留まっている。また、「形容詞の連用形+する」の扱いは教科書によって異なっている他、これらの自他対応の関係についてはあまり重要視されていないようである。本稿で示したように、形容詞派生動詞と「形容詞の連用形+なる／する」には類似性がみられる一方で、使用傾向には差がみられるため、それをどのように日本語教育現場や日本語教師養成に取り入れることができるかについて、考えていく必要がある。

注

- 1) 杉岡(2002)において、「-まる」「-める」が付く形容詞語幹は20ほどであり、それほど生産性が高いとは言えない点が指摘されている。
- 2) 「有対自動詞」とは、対応する他動詞をもつ自動詞を指す。
- 3) 実際の用例では明確な使い分けがみられないことから、本稿では便宜上「早」と表記し、「速」と「早」の両方を分析の対象とした。
- 4) タグ付けの誤りなどによる収集漏れを防ぐために、語彙素検索ではなく、漢字表記およびひらがな表記による文字列検索を行った。

参考文献

- 奥津敬一郎(1967)「自動化・他動化および両極化転形—自・他動詞の対応—」『国語学』第70集, 46-66, 国語学会。
新谷知佳(2022)「自他対応をもつ動詞における自動詞と他動詞の使用比率に基づく分析—動詞対の形態的特徴に着目して—」『KLS Selected Papers 4』73-88, 関西言語学会。
杉岡洋子(2002)「形容詞から派生する動詞の自他交替をめぐって」伊藤たかね編『文法理論：レキシコンと統語』91-116, 東京大学出版会。
関口雄基(2020)「{-ar-}型自動詞と、対応する他動詞の派生関係について：『日本国語大辞典精選版』の初出年代から比較した有対自動詞の性質について」『筑波日本語研究』24, 31-66, 筑波大学大学院博士課程人文社

会系日本語学研究室.

早津恵美子 (1987) 「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究』6, 79-109, 京都大学言語学研究会.

用例出典・資料一覧

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

コーパス検索アプリケーション『中納言』

『日本国語大辞典第二版』小学館 (Japan Knowledge 収容)

(博士後期課程学生)

(2023年8月17日受付)

(2023年12月5日掲載決定)